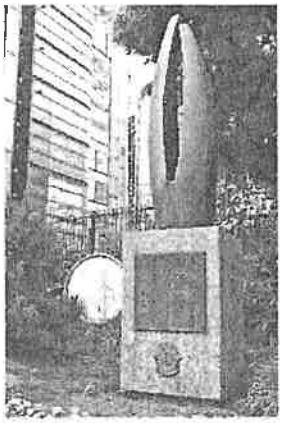
都会イメージ 流行歌に

文人の武蔵野

東京行進曲 ③

詩人西條八十（1892～1970年）は、37歳、大学で仏文学を講ずる助教授だった1929年（昭和4年）、縁のあった日活からの依頼を受け、映画宣伝のための主題歌制作という本邦初の企画に作詞家として参画します。関東大震災で被災した人々が愛唱歌で慰撫される瞬間を目撃したことも、彼の背中を押しました。作曲家中山晋平との名コンビが誕生し、「東京行進曲」はレコードも映画も小説も大ヒットします。

冒頭の「昔恋しい銀座の柳」というフレーズは、現実の街を動かし、震災で焼けた銀座の柳を復活させました。4番の「いっそ小田急で逃げましょか」は「おだきゅる」という流行語を生みました。「変る新宿あの武蔵野の月もデパートの屋根に出る」は、大正期まで牛馬が往来していた「あの武蔵野」の変貌ぶりを動的にイメージさせて「新宿」の知名度をあげました。



新宿駅東口に立つ西條八十の詩碑とモニュメント

西條は、東京牛込払方町の生まれです。払方は江戸期からの屋敷町で、西條家も大久保に広大な土地を所有する素封家でした。

彼は中学から早稲田で学び、14歳の時に国木田独歩の継承者として芥川龍之介も認める詩人で仏文学者の吉江孤雁と出会い、文学を志します。16歳の時に独歩の訃報を聞き学校をサボって葬儀に参列します。やがて若山牧水や土岐善麿が武蔵野と呼んだ「戸山ヶ原」に下宿。その後も、西條の言葉を借りるなら「新緑のトンネル」たる西大久保、「武蔵野の一角」の「柏木の里」などに暮らします。払方、早稲田、戸山、大久保、柏木は、いずれも現在の新宿区です。武蔵野としての新宿を熟知して「変る新宿あの武蔵野」と詠んだ西條は、戦後にも「武蔵野の秋」という詩を「月刊読売」に発表し、独歩を追憶しています。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

武蔵野

本社 江東
立川 武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

■ あすの暦

5月15日（土曜日）
旧 4月4日＜先勝＞

通日 135
月齢 3.3
（正午）

＝東京標準＝

日出	4.36	満潮	5.52
日入	18.39		19.39
月出	6.45	干潮	0.34
月入	21.51		12.54

（中潮）

おすすめの1冊

「名作童謡 西條八十100選」

西條八十は、14歳で父を亡くし財産を略取されます。以来、兜町で株を売買するなどして糊口をしのぎ、やがて大学の教壇に立ちます。詩集を世に出し、民謡、歌謡、童謡等を作り、論文や仏詩の翻訳を発表します。金子みすゞを見いだした西條の童謡詩人としての代表作を味わえる一冊です。

（上田信道編、春陽堂書店）